和's YAMATO（わずやまと）

春号 2019

土合山の家（谷川岳登山口の宿泊施設）
撮影：橋本　勝　氏

—特集「いだてん」—

◎日本人初出場の五輪マラソン
◎ベルリン五輪の中止、マラソンの指導者を志す
◎タスキをつなぐ箱根駅伝の誕生
◎再び五輪の舞台へ
◎現役引退後はスポーツ振興に尽力

◎郷土史跡めぐり：最大山 雙林寺（群馬県渋川市）
◎シリーズ群馬の芸術家④ 動物写真家 小原 玲 氏
◎お客様紹介 ㈱アイテク 様
◎名瀑探訪 小中大滝（群馬県みどり市）

名瀑探訪

小中大滝（こなかおおたき）

群馬県みどり市

小中大滝 新緑（みどり市）「ググっとぐんま写真館」から転載

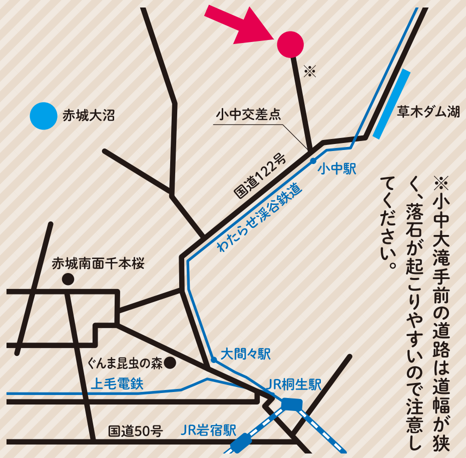
壮大な滝とスリルのある吊り橋は絶好のハイキングスポット ---

小中大滝（こなかおおたき）は小中川の清流が長い年月をかけて造り上げた最大落差96ｍの壮大なスケールを誇る滝です。みどり市の小中大滝自然公園の中にあります。

滝の周辺には、春になると新緑に覆われ、ヤシオツツジが所々にピンクの花を咲かせます。駐車場から川を渡った東屋周辺ではシャクナゲの花も楽しめます（群生したカタクリが4月上旬、ヤシオツツジやシャクナゲは4月中旬～下旬ごろ）。10月下旬ごろになると、小中大滝を覆うように木々が秋色に染まり、雄大な自然と紅葉を満喫できます。

滝が展望できる観瀑台に向かう途中には、最大傾斜44％の急傾斜の階段式吊り橋「けさかけ橋」がかかっています。大滝を見るためには、この橋を渡らなくてはなりません。ちょっぴりスリルあるつり橋となっています。

小中大滝 けさかけ橋（みどり市）「ググっとぐんま写真館」から転載



アクセス

わたらせ渓谷鐵道小中駅下車約7キロ
車約15分・徒歩約2時間
国道122号線「小中」交差点を左折（日光方面へ向かって）約7キロ

※小中大滝手前の道路は道幅が狭く、落石が起こりやすいので注意してください。

和's YAMATO（わずやまと） 春号（第40号）2019

和's YAMATO 2019 春号／2019年3月発行
発行：株式会社ヤマト（広報室）群馬県前橋市古市町118
TEL.027-290-1891 FAX.027-290-1896

建設プロダクト ヤマト

株式会社ヤマト 群馬県前橋市古市町118 〒371-0844 TEL.027-290-1800（代） FAX.027-290-1896
支店／東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎、東北　営業所／軽井沢、伊勢崎、神奈川県央、茨城、太田、東松山、新潟、長野、渋川、川口、多摩、横須賀、滋賀
附属施設／大和環境技術研究所、大和分析センター、加工センター、朝倉工場、教育センター、コンタクトセンター、サポートセンター
ヤマトホームページ www.yamato-se.co.jp/

『和's YAMATO（わずやまと）』の由来　ヤマトの漢字の「和」、Water & Air の頭文字を合わせて「WA」、「S」はスタート。ヤマトが発信するメッセージです。

2019年NHK大河ドラマ

いだてん

日本マラソンの父

金栗（かなくり） 四三（しそう）

2019年のNHK大河ドラマ「いだてん〜東京オリムピック噺［ばなし］」の前半の主人公は、明治〜昭和期に活躍した「日本マラソンの父」と称される金栗四三氏（本文は敬称略）。第二次世界大戦前のオリンピックに三回出場という偉業を成し遂げたアスリートだ。日本人として初めてオリンピックに出場したこと、箱根駅伝競走を創ったことなど、日本の陸上スポーツに貢献した生涯を描いている。

日本人初出場の五輪マラソン

金栗四三は、明治四五年（一九一二）七月一四日にスウェーデンの首都・ストックホルムで開催された第五回オリンピックのマラソン競技に出場した。極度の緊張で前夜は熟睡できず、スタミナ源の朝食もほとんどとらず、良好とはいえないコンディションで競技場に入った。午後一時四八分に出場選手六八人が一斉にスタートする。序盤からほとんどの選手が猛スピードでトラックを駆け、街中のコースへと飛び出していく。四三はこの展開にあせったが、五キロ地点で前を走る選手を追い抜いた。冷静さを取り戻した四三は、独自で編み出した呼吸法である「スースー、ハーハー」のリズムを刻みながら、徐々に順位を上げた。

ところが、十キロを過ぎた地点で猛烈な息苦しさに襲われ、気力を振り絞って走り続けたものの、折り返し地点を過ぎたところでコースからはずれ、気を失い倒れてしまった。舗装路の照り返しと直射日光を浴び過ぎて熱中症になったのだ。倒れた場所は、農家の庭先の沿道だった。農家はペトレ家といい、ペトレ家の人々は四三を介抱し、飲み物とパンを与え、家の中で休むように促したが、四三が固辞するので外套を掛けて去っていった。その直後、沿道で応援していた大使館関係者が偶然通りかかり、倒れている四三を発見し、保護したのだ。猛暑の中でのマラソン競技は、半数の三四人が途中棄権し、一人が死亡するという過酷なレースとなった。

四三は歩ける位に回復したため、ホテルの部屋に戻った。オリンピックに同行している嘉納治五郎（四三を五輪に導いた恩人）、大森兵蔵（日本選手団の監督）らは、四三の途中棄権を知らない。四三を探しあぐねてホテルに戻ると、部屋で寝ている四三を見つける。開会式出席のため同行していた京都大学教授の田島は、憔悴している四三を叱りつけた。

四三は自らの不甲斐なさを詫び、四年後のベルリン大会に向けて鍛錬することを誓い、雪辱を期すことを約束した。

金栗足袋

［玉名市立歴史博物館こころピア所蔵］

ストックホルム大会のユニフォーム（表・裏）

［和水町教育委員会所蔵］

帰国後ユニホーム姿で記念撮影

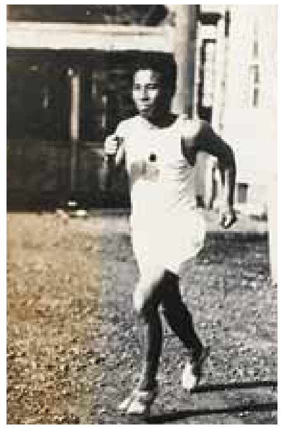
［玉名市立歴史博物館こころピア所蔵］

スヤと結婚するも、マラソンの練習に明け暮れる

ストックホルム五輪から二年後の大正三年（一九一四）、四三は東京高等師範学校を卒業した。二年後に迫ったベルリン五輪に向けてトレーニングを続けていたため、教職に就くことは辞退し、高師研究科に籍を置き、マラソン三昧の日々を送っていた。ほどなくして、兄の実次から、遠戚にあたる池部家の養子にならないかと持ちかけられた。池部家に嫁いだ叔母にあたる幾江が、主人に先立たれ子供がいないため、池部家を継いでほしいと言ってきたのだ。四三はこの話を受け入れると、直後に幾江から見合い話を持ちかけられる。

見合い相手は同郷の医者の娘で春野スヤといい、実次も村ではしっかり者と評判のスヤを気に入っていた。同年三月、高師を卒業した四三は急いで帰郷しスヤと対面する。二人は互いに惹かれ合い、結婚を決めた。四三はオリンピックに向けて東京でマラソンの練習に打ち込んでいるため、郷里には戻れない。スヤもそのことに理解を示し、結婚当初は別居生活が続いた。

四三はストックホルムで炎天下のレースに苦しんだ体験から、暑さを克服する練習に励んだ。真夏の昼間、千葉県館山市の砂浜を走る練習で、暑さに少しずつ慣れ、一気に約三二キロを走れるまでになったという。また、ヨーロッパの舗装道路がコースとなっているため、足袋の改良をしなければならなかった。当時の日本では舗装道路は少なく、硬い路面を長距離走ることに耐えられなければならない。足袋製造の播磨屋の主人・黒坂辛作とともに足袋の底が破れないように様々な工夫をした。ストックホルム大会の準備不足を補い、ベルリン大会に向けて着々と準備を進めた。



胸に日の丸を付けたランニングで練習する ［和水町教育委員会所蔵］

池部家家族写真

（右端が四三、左端がスヤ、中央スヤの弟と母イクエ）

［玉名市立歴史博物館こころピア所蔵）］

「金栗足袋発祥の地」の碑

ハリマヤ足袋店は明治 36 年（1903）に姫路から上京した黒坂辛作が東京の大塚（現在の文京区大塚、東京メトロ茗荷谷駅付近）に創業した。創業の地に「金栗足袋発祥の地」の碑が設置されている。創業地の至近には東京高等師範学校（現在の筑波大学東京キャンパス）があった。

ベルリン五輪の中止、マラソンの指導者を志す

大正二年（一九一三）、四三は第一回日本陸上競技選手権のマラソン競技に出場し、2時間31分28秒で走り世界記録を更新、さらに翌年の同大会でもタイムを縮め、今度こそメダル獲得と期待が膨らんだ。

しかし、大正三年六月に第一次世界大戦が勃発、戦争は長期化し、大正五年の開催年になっても、戦火は激しさを増すばかりで、開催国のドイツは戦争の当時国でもあったため、ベルリン五輪の中止が決定した。中止の知らせを聞いた四三はがっくりと肩を落とした。ヨーロッパの空に日章旗を掲げ、四年前の雪辱を果たすための舞台を失った悔しさは大きく、四三の顔から笑顔を消し去ったという。

四年後のオリンピックに向けて頑張ります、とは軽々しく言えない。ベルリン五輪の時に二六歳と体力的に最も充実しており、今後さらに過酷な練習を続ける自信が持てず、引退を決意したという。

マラソンランナーとしての全盛期に、最高の舞台であるオリンピックが中止になるという悲運にもめげず、四三は前向きに次なる目標に向かって走り始める。それは、後輩を指導することだった。マラソンの第一人者である自分が走れば大勢の後輩がついて来る。その中からオリンピックの表彰台に立つ選手が必ず現れるはずだ。四三が念願している異国の競技場に日章旗を掲げる目標は、後輩に引き継がれたのである。

タスキをつなぐ箱根駅伝の誕生

大正六年（一九一七）四月、日本で初めて開催された駅伝、「東京奠都五十年奉祝・東海道駅伝徒歩競走」が開催された。四三はこの大会の企画に携わり、自らもアンカーとして走った。この大会は読売新聞社が上野で開く大博覧会の協賛イベントとして企画したもので、関東圏と関西・中部圏の選手が二チームに分かれ競いあった。京都の三条大橋から東京の不忍池まで五一六kmを二三区間に分け、昼夜兼行で三日間走り継ぐ壮大なレースだった。関東チームのアンカーは四三が努め、ゴールの不忍池は観衆で熱気に包まれ、日本初の駅伝は大成功だった。

箱根駅伝銅像

四三は、強いマラソンランナーを育成するために、大学に競い合わせての駅伝を思いついた。マラソンの練習は孤独になりがちなため、チームプレーの要素もある競技が選手を強くし、全体がレベルアップすると考えたのだ。大正九年（一九二〇）、第一回目の大学対抗駅伝が東京―箱根間で開催された。参加校は四三の母校である東京高師、早稲田、慶応、明治の四大学で、東京高師がゴール間近で逆転優勝し、観客も大いに盛り上がった。「東京箱根間往復大学駅伝競走」（箱根駅伝）は、第二次世界大戦の時期には中断したものの、昭和二二年（一九四七）には復活し、全国ネットのテレビで放映され、正月の風物詩として定着している。

再び五輪の舞台へ　アントワープ、パリ大会に出場

第一次世界大戦の終戦から二年が経過した大正九年（一九二〇）、ベルギーのアントワープで八年ぶりにオリンピックが開催された。四三は四年前に中止となったベルリン大会に出場出来なかった後、五輪は強く意識していなかったが、選考会で好成績を収め、二度目の出場機会を得た。同年八月二二日、アントワープ大会のマラソン競技が行われ、四三は中間点を過ぎたあたりからピッチを上げ、後半三〇キロ付近で五位につけた。今度こそ入賞かメダルに届くかと周囲は期待したが、結果は十六位だった。それでも、日本人ランナーとしてオリンピックで完走という立派な成果を上げた。

大正一三年（一九二四）七月、四三は第8回オリンピックパリ大会に出場した。この時は既に三三歳で、長距離走選手としてはピークを過ぎていたが、請われて国内選考会に出場すると若手を抑えて優勝し、日本代表となり、三度目のオリンピック出場となった。パリの競技当日はストックホルムの時と同様の猛暑で、三〇キロを超えたあたりで意識を失い、途中棄権となった。この大会を最後に四三は現役を引退する。

パリ大会で激走する四三
［玉名市立歴史博物館こころピア所蔵］

第７回オリンピックアントワープ大会
出場日本選手一行記念写真（四三は前列右から３番目）

アントワープ大会ランニングシャツ
［3点とも玉名市立歴史博物館こころピア所蔵］

日本列島縦走で脚光浴びる

「マラソンの父」と呼ばれた四三は、現役時代に自らのトレーニングと長距離走競技の普及を目的に、日本国中を走っている。下関―東京約一二〇〇キロメートルや樺太―東京約一三〇〇キロメートルなどの「超長距離走」に挑み、当時大きな話題を呼んだ。

最初のきっかけは、東京高等師範学校（現筑波大）の後輩にあたる秋葉祐之に、卒業記念として下関―東京の走破を持ちかけられたことから始まる。当初、四三はこの壮大な計画に驚いたものの、共に走ることを快諾した。新聞社の協力を得られ、一日約六〇キロを二〇日走る一大イベントとなった。

大正八年（一九一九）七月二二日下関をスタートし、当初は順調に走ることができたものの、途中で秋葉が足を負傷し、完走が危ぶまれた。それでも二人は助け合いながらゴールを目指し、予定通り八月一〇日に大勢の観衆が待つ東京に到着。超長距離走の挑戦は成就した。四三は同年一一月二三日に日光―東京間一三〇キロを一〇時間で完走、大正一一年（一九二二）八月には、再び秋葉と共に樺太―東京間を二〇日間で走破し、その超人的な持久力に人々は驚嘆し、偉業を称えた。昭和六年（一九三一）には二〇日間かけて九州を走り、樺太から九州まで、日本列島の縦走を成し遂げた。

下関ー東京間で着用した
ランニングシャツ、パンツ、頭巾帽子
［玉名市立歴史博物館こころピア所蔵］

大正 11 年 8 月 26 日　樺太ー東京間走破　完走し秋葉祐之と

大正 8 年 8 月 10 日　下関ー東京間走破　ゴールする四三

［2 点とも玉名市立歴史博物館こころピア所蔵］

古今亭志ん生が暮らした街、浅草

明治23年（1890）、浅草公園に建てられた凌雲閣は、東京における高層建築物の先駆けとして建築された。レンガ造りで高さ52m、12階建てで、日本初の電動式エレベーターが設置され、通称「浅草十二階」と呼ばれ、下町のシンボルとなった。明治43年（1911）には演芸場ができ、来場者が増えたものの、大正12年（1923）の関東大震災で倒壊し、再建されることなく取り壊された。

凌雲閣が完成した明治23年には、「落語の神様」と呼ばれた五代目古今亭志ん生（本名：美濃部孝蔵）が浅草で誕生している。志ん生は明治、大正時代は下積みを経験し、第二次世界大戦後の昭和20年代後半からは破天荒な芸風が受けて爆発的な人気となり、寄席やラジオで活躍する。

浅草は大正時代のオペラ、昭和初期のレビュー、軽喜劇など大衆娯楽の中心地となり、第一線で活躍した芸能人の大多数は浅草で芸を磨いた。志ん生も浅草の息吹を感じながら暮らし、長い精進の末に名人芸を身に着けた。

壁画で復活した「浅草十二階」
浅草凌雲閣を描いた浮世絵を拡大複製した高さ8mの壁画。2018年9月に完成。3階建てビルの壁面に貼られている。このビルの敷地から凌雲閣の土台が出土した。（台東区浅草2丁目14番地）

現役引退後はスポーツ振興に尽力

四三は大正一三年（一九二四）の現役引退後、女子スポーツの振興に携わった。アントワープ大会の帰途に寄ったベルリンでは、女子の体育が盛んで、日本でも女子がスポーツに参加することで、全体のレベルが上がると実感したのだ。帰国後、四三は行動を起こす。国内初の女子テニス大会や女学校対抗の陸上競技大会を開催した。つつましさが女性の美徳とされた時代にも関わらず、徐々に理解者が増えて女子の競技団体もつくられた。駅伝の注目度を高めた時のように、女子スポーツ振興のために次々とアイディアを出して実行するのだった。

昭和五年（一九三〇）七月、兄の実次が病死し、一家の大黒柱が不在になったこと、郷里の熊本でスポーツの普及に努めようと考え、翌年玉名に帰郷する。妻や養母、子供たちと過ごす生活が始まった。池部家は地主なので、生活のために働く必要はない。四三はマラソンや駅伝の大会を開催し、地元玉名を中心に青少年のマラソン熱を高めた。講演や指導で県内を回り、一緒に走る子どもや学生からは親しみを込めて「金栗さん」「マラソンのおじさん」と呼ばれ、郷里での生活は充実していた。

昭和一一年（一九三六）、四三が四五歳の時、嘉納治五郎から手紙が届いた。嘉納の手紙には、東京オリンピックの開催が決定したので、四三にも準備に加わって欲しいとの要請だった。四三は、熊本に落ち着き、家族とともに安らぎある生活を送っている。たとえ恩師の要請といえども、再び上京して仕事をすることは考えていなかった。嘉納には断りの手紙を書こうとしていたところ、妻のスヤは「私たち家族も一緒に上京して、お国のために働く四三さんを支えます」と申し出た。

四三は妻の後押しを得て、翌年再び上京した。女学校の教師をしながら東京五輪の開催準備に奔走し、後輩のマラソン選手たちの指導にも当たった。妻スヤと、六人の子供も呼び寄せ、再びオリンピックとスポーツの普及にまい進するのだった。

〈次号に続く〉

参考文献
「マラソンの父　金栗四三展　図録」玉名市立歴史博物館こころピア発行
「金栗四三の生涯」洋泉社発行

「54 年 8 ヶ月 6 日 5 時間 32 分 20 秒でゴールした瞬間」

四三は第 5 回ストックホルム五輪マラソンで棄権したため、スウェーデンの五輪委員会から完走するよう要請された。これは五輪に貢献した四三に対するスウェーデンの粋な計らいで、75 歳の四三は昭和 42 年（1967）3 月に 54 年 8 カ月 6 日と 5 時間 32 分 20 秒 3 のタイムで万歳をしながらゴールした。

［ 玉名市立歴史博物館こころピア所蔵 ］

「女子マラソンの歴史」

第1回のアテネオリンピックでは、女子マラソン競技は無かったが、競技当日にメルポメネという女性が隠れて同じコースを走り、彼女が史上初の女子マラソンランナーとされている。1966年、ボストンマラソンで主催者に隠れて参加したギブというアメリカ人女性が、3時間 21分 40秒というタイムで走り、年々非公式の女子参加者が増えたため、1972年に女子の参加が認められた。1974年のボストンマラソンを2時間 47分 11秒というコース新記録で制したのは、ランニング歴5年の小柄な38歳の日本人「ゴーマン美智子」だった。世界で初めて国際陸連が公認する女子単独マラソン大会が1979年開催の第1回「東京国際女子マラソン大会」で、1984年のロサンゼルス五輪から正式に女子マラソンが五輪競技に採用された。

いだてん 観光スポットの紹介

① 金栗四三生家記念館

見どころ：築200年超の生家の内部を。一部限定公開。金栗四三にまつわるパネル展示や映像展示
観覧料金：高校生以上 300 円
開催期間：2019 年 12 月 23 日まで
開館時間：9時～ 17時（最終入館 16 時 30 分）
所　在　地：熊本県和水町中林 546 番地
電話番号：0968－34－3047（和水町社会教育課）

② 金栗四三ミュージアム

見どころ：金栗四三のユニフォーム、マラソン足袋などの遺品やオリンピックでの活躍を紹介するパネル展示など。
観覧料金：高校生以上600 円
開催期間：2020年1月13日まで
開館時間：9 時～ 17 時（最終入館 16 時 30 分）
所　在　地：熊本県和水町大田黒 623－1（三加和温泉ふるさと交流センター隣接）
電話番号：0968－34－4300

③ いだてん　大河ドラマ館

見どころ：大河ドラマ「いだてん」の世界観を体験できる。
観覧料金：高校生以上 600 円
開催期間：2020 年 1 月 13 日まで
開館時間：9 時～ 17 時（最終入館 16 時 30 分）
所　在　地：熊本県玉名市繁根木 163
電話番号：0570－06－5588

④ 玉名市立歴史博物館こころピア

見どころ：金栗四三の遺品と大河ドラマ紹介パネルを展示
観覧料金：無料
開催期間：2019年5 月 6 日まで
開館時間：9 時～ 17 時（最終入館 16 時 30 分）
所　在　地：熊本県玉名市岩崎117
電話番号：0968-74-3989

⑤ 九州新幹線新玉名駅にある四三の銅像

金栗四三の略年譜

1891年（明治24年）	8月20日		熊本県玉名郡春富村中林（三加和町→現・和水町）に、父・信彦と母・シエの七番目の子として誕生
1897年（明治30年）	4月		玉名郡春富村吉地尋常小学校に入学
1901年（明治34年）	4月		玉名北高等小学校に入学（大原村相谷）。往復12キロを走って通う
1905年（明治38年）	3月4日		父・信彦、56歳で死去
	4月		熊本県立玉名中学校（現玉名高校）に進学
1906年（明治39年）	4月		学業優秀で特待生に推挙される
1909年（明治42年）	9月		海軍兵学校の一次試験身体検査で、結膜炎のため不合格
1910年（明治43年）	4月10日		東京高等師範学校（現筑波大学）に入学
	春		校内長距離競争で600人中25位になる
	10月		校内長距離競争で3位入賞
1911年（明治44年）	4月		東京高等師範学校本科へ進学。徒歩部に入部
	11月	（20歳）	オリンピック国内予選で優勝
1912年（明治45年）	2月15日		第5回オリンピックストックホルム大会のマラソン競技日本代表選手に推薦される（短距離は三島弥彦）
	3月		代表を固辞するも、嘉納会長の説得で参加を決意する
	7月6日		第5回オリンピックストックホルム大会開会式。黒足袋姿の四三は「NIPPON」のプラカードを掲げて入場行進
	7月14日		マラソン競技に出場するが、途中棄権
	11月22日		「第2回日本陸上競技選手権大会」マラソンを2時間19分30秒の世界最高記録で二連覇
1914年（大正3年）	4月		春野スヤと結婚
	11月20日		「第3回日本陸上競技選手権大会」マラソンで三連覇。大日本体育協会功労賞を受賞する
1916年（大正5年）	4月		神奈川県師範学校に着任
	5月	（24歳）	第6回オリンピックベルリン大会が中止
1917年（大正6年）	4月27日～29日		日本初の駅伝「奠都50周年記念東海道五十三次駅伝競走」を企画
1920年（大正9年）	2月14日～15日		第一回東京箱根間往復大学駅伝競争（箱根駅伝）を企画
	4月		オリンピック・アントワープ大会の国内予選で優勝し、2度目の代表選手に選出される
	4月20日～9月12日		第7回オリンピックアントワープ大会開催
	8月22日	（29歳）	マラソン競技に出場し16位
1924年（大正13年）	5月		オリンピック・パリ大会の国内予選で優勝し、3度目の代表選手に選出される
	5月4日～7月27日	（33歳）	第8回オリンピック・パリ大会開催
	7月12日		マラソン競技に出場するが途中棄権。帰国後、現役引退を決意する
1930年（昭和5年）	7月		長兄・実次が急性肺炎で死去
1931年（昭和6年）	8月	（40歳）	東京高師後輩の栗本義彦と九州を一周。20日間で走破
1936年（昭和11年）	12月		嘉納治五郎の要請を受け、東京オリンピック開催準備のために上京
1938年（昭和13年）			第12回オリンピック東京大会の開催権返上決定
1947年（昭和22年）	12月5日		第1回金栗賞朝日マラソン（現・福岡国際マラソン）開催
1953年（昭和28年）		（62歳）	第57回ボストンマラソン日本代表監督を務める。山田敬蔵選手が世界記録で優勝
1955年（昭和30年）	11月3日		紫綬褒章受章
1962年（昭和37年）	12月	（71歳）	玉名市名誉市民に
1964年（昭和39年）	10月10日～24日		第18回オリンピック・東京大会開催
1983年（昭和58年）	11月13日		92歳で没

いだてん～東京オリムピック噺～ 人物相関図

主人公

金栗四三（中村勘九郎）
「いだてん～東京オリムピック噺～」前半の主人公。日本で初めてオリンピックに出た男。

東京高師・大日本体育協会他

生涯の恩師

嘉納治五郎（役所広司）
アジア初のIOC委員で"日本スポーツの父"

大森兵蔵（竹野内豊）
ストックホルムオリンピック日本選手団監督

永井道明（杉本哲太）
東京高師教授。ヨーロッパから体操を持ち込む

黒坂辛作（ピエール瀧）
足袋の播磨屋店主

田島錦治（ベンガル）
京都帝大教授

大森安仁子（シャーロット・ケイト・フォックス）
夫と共にストックホルムに同行し、選手に英語やテーブルマナーを指導

可児 徳（古舘寛治）
東京高師助教授。徒歩部部長として四三を指導

野口源三郎（永山絢斗）
東京高師の後輩。アントワープオリンピック代表選手で主将

内田定槌（井上肇）
駐スウェーデン公使として、日本選手団をサポート

熊本の人々

春野スヤ（綾瀬はるか）
四三の幼馴染で、後に妻となる

池部幾江（大竹しのぶ）
スヤの義母

金栗実次（中村獅童）
金栗家の長男で大黒柱

金栗シエ（宮崎美子）
四三の母

春野先生（佐戸井けん太）
スヤの父

池部重行（高橋洋）
幾江の息子

美川秀信（勝地涼）
四三の親友で高師の同級生

三島家・天狗倶楽部

三島弥彦（生田斗真）
短距離走で日本初のオリンピック選手になる

三島弥太郎（小澤征悦）
三島家当主。第八代日本銀行総裁にして貴族議員

シマ（杉咲花）
三島家の女中。女性ながらにオリンピック出場の夢を持つ

三島和歌子（白石加代子）
薩摩出身の華族。三島家の大奥様

押川春浪（武井壮）
天狗倶楽部の創設者。漱石と並ぶほどの人気作家

吉岡信敬（満島真之介）
ヤジ将軍と呼ばれる日本初の応援団長

本庄（山本美月）
女性記者。四三を熱心に取材する

孝蔵をとりまく人々

美濃部孝蔵（森山未來）
若き日の志ん生。清さんを通じて四三と交流する

清さん（峯田和伸）
浅草の人力車夫

橘家円喬（松尾スズキ）
伝説の落語家。孝蔵の師匠

小梅（橋本愛）
浅草十二階を根城に客を引く遊女

万朝（柄本時生）
噺家の仲間

志ん生一家と弟子

ドラマの語り手

古今亭志ん生（ビートたけし）
昭和の大名人と呼ばれる"落語の神様"

五りん（神木隆之介）
志ん生の弟子

奈津子（小泉今日子）
志ん生の長女

おりん（池波志乃）
志ん生の妻

知恵（川栄李奈）
五りんの恋人

今松（荒川良々）
五りんの兄弟弟子

1964 年東京招致チーム

1964 年東京オリンピック招致に尽力

田畑政治（阿部サダヲ）
「いだてん～東京オリムピック噺～」後半の主人公。日本にオリンピックを呼んだ男。

平沢和重（星野源）
ジャーナリスト

岩田幸彰（松坂桃李）
JOC常任委員

東龍太郎（松重豊）
東京都知事

最大山 雙林寺 長尾昌賢木像と七不思議

白井宿観交（光）案内人の会 会長 須田 孝

雙林寺は文安四年頃、白井城主長尾昌賢（ながおしょうけん）が相州最乗寺の住職であった月光正文禅師を迎え、創建されました。本堂には群馬県指定重要文化財の白井城主長尾昌賢木像が安置され、境内地には群馬県指定天然記念物のカシの木、カヤの木があります。また、寺には開山にまつわる七不思議が伝承されています。

雙林寺本堂の外観（渋川市中郷2399−7）

白井城主長尾昌賢（ながおしょうけん）は室町時代の武将で、文安元年（一四四四）頃、関東管領山内上杉氏の家宰となり、その勢力は絶大だった。戦国時代でありながら文教を奨励し、仁政を施して領民から慕われた。昌賢は文安四年頃、相州最乗寺の住職であった月光正文禅師を迎え、雙林寺を創建する。また、足利学校（栃木県足利市）や金沢文庫（横浜市金沢区）と並び称された「白井の聖堂」を城内に設け、京都から藤原清範を招き、家臣らに十三経や史書などを学ばせた。寛正四年（一四六三）に七六歳で鎌倉に没した。

白井城主長尾昌賢木像（雙林寺本堂内安置）
通常は下の写真のように、布に覆われて、拝顔することはできません
群馬県指定重要文化財 指定年月日 昭和30年1月14日

豪壮な山門

雙林寺の七不思議

1 開山の一つ拍子木

開山堂台上に置いてある、寺中で、何か悪いことがおこりそうになると、深夜この一つ拍子木が自然に鳴る。

2 蛇頭水（龍神水）

この流水は龍の神が月江禅師の徳を慕って湧き出させたものといわれ、人の多少によって増減し「人増やせば水増す」という。現在は涸れている。

3 千本樫

一株から無数の支幹がはえ、この木は絶対に切ることができない、もし切ると寺か住職に災難がくる。

4 開山のつなぎカヤ

ご開山さまがカヤの実で作った数珠を持参され、それを庫裏の横に蒔いたら大木となり、その実に針糸の穴が有る。

5 忠度桜

開山の夢枕に、忠度が辞世の句〝行き暮れて〟と詠ったが、下句を依頼され〝花に心はなかりけり〟とし、成仏させ、お礼のムチが桜になった。

6 山門小僧と総門のツル

夜、小僧が出て難問答を仕掛け、大鳥が出ては荒らすので戒めの打撃をなした。翌朝、山門の小僧に腕なく、ツルの足に穴があいていた。

7 底なし井戸（鏡の井戸）

この井戸をのぞいて顔が写らないと「即刻死す」といわれる。

動物写真家 小原玲写真展
―アザラシの赤ちゃんからシマエナガちゃん―

2019年2月3日(日)～4月5日(金)
株式会社ヤマト 本社1階ギャラリーホール 入場無料

開館時間：午前10時～午後5時
休館日：土・日・祝日・(3月16日は開館)
ギャラリートーク：3月16日(土)午後2時～

シリーズ 群馬の芸術家 ❹

小原 玲

報道写真から動物写真へ、「好き!!」が世界を救う

元群馬県立近代美術館学芸員　染谷 滋

シマエナガに魅せられて

昨年、講談社から出版された写真集『ひなエナガちゃん』は、『シマエナガちゃん』、『もっとシマエナガちゃん』に続く小原玲のシマエナガ三部作だ。

シマエナガは北海道に生息するエナガ（柄長）の亜種で、一四センチの全長の半分以上が尾羽なので、印象としては大変小さな鳥だ。頭部全体が白いのが特徴で、そこにつぶらで黒く小さな瞳があるため、何ともかわいらしい表情をしている。その姿から「雪の妖精」「雪だるま」などと称される。

だれが見ても「かわいい」としか言いようのない写真だが、小原玲がこの世界にたどり着くまでには、大きな方向転換があった。

生い立ちから写真家への道

小原玲は一九六一（昭和三六）年二月二日に東京の文京区に生まれた。幼い頃に渋川市に転居。小学校四年で吉岡町に移り、高校を卒業するまで群馬に住んだ。

吉岡中学校二年生のとき、父親が急逝。遺品の一眼レフカメラを手にしたことで写真への興味が沸いた。

前橋高校に進学すると迷わず写真部へ。図書館で「写」がつく本は片っ端から目を通したと言う。授業をサボって暗室にこもることも度々あったらしいが、当時の高校には学生の自由を大目に見る雰囲気があった。

高校三年生のとき、旺文社が主催する第三回高校生フォトコンテストでグランプリを受賞。同じ年の春、前橋高校野球部は第五〇回選抜大会で史上初となる完全試合を達成しており、投手の松本稔と共に小原は学校からも表彰された。

大学は茨城大学へ。卒業後は迷わず写真の道を選び、一九八四年四月にある写真プロダクションに所属するのだが、そこで同年一一月に講談社が創刊する写真週刊誌『フライデー』の専属カメラマンとして活躍することになる。

報道写真家として

一九八〇年代はバブル景気と併走するように写真週刊誌が全盛だった。新潮社の『フォーカス』、光文社の『フラッシュ』と共に「3F」と呼ばれた『フライデー』は、スクープ写真が社会現象となるほどだった。

若さに物を言わせて事件を追いかけた小原は、文字通りエースカメラマンだった。田中角栄元首相の病室、、御巣鷹山日航機事故の凄惨な現場、ロス疑惑の三浦和義逮捕の瞬間など、小原の撮った写真が載らないときはないほどだった。

しかし、もともとロバート・キャパや沢田教一のような国際的報道写真家にあこがれていた小原は、国内の写真週刊誌が次第に芸能スキャンダルへと傾斜していくことに嫌気がさしていた。そんな中で起きた一九八六年一二月のフライデー襲撃事件は、小原の気持ちを決定づけた。

一九八七年からアメリカの写真通信社に移籍して世界中を飛び回ることになった小原は、天安門事件や湾岸戦争、ソマリアの内戦などを取材。ここでも持ち前の行動力と忍耐強さとで数多くの作品を残し、「ザ・ベスト・オブ・ライフ」にも選ばれている。

ところが、伝えたい思いが正しく伝わることは少なく、難民キャンプでやせて悲惨な子どもだけを探している自分に愕然とすることもあった。

アザラシの赤ちゃんとの出会い

そんなときにアザラシの赤ちゃんに出会う。カナダ北東セントローレンス湾の流氷で生まれるタテゴトアザラシの赤ちゃんは、二月末から三月初旬に出産を迎える。アザラシの子育ては二週間しかなく、この時期のアザラシほどかわいいものはない。

「好き」で撮った写真だったが、かわいいアザラシの写真はたちまち人気を博した。その頃、森下裕美の漫画『少年アシベ』の中のゴマフアザラシのゴマちゃんがブームになっていたのも追い風だった。

一九九〇年七月、文藝春秋から出版した『アザラシの赤ちゃん』は一〇万部を超す大ヒットとなり、小原は毎年のようにアザラシウォッチングに出掛けることになった。こうして、報道写真家から動物写真家へと転身する。

地球温暖化への警鐘

動物写真家と言っても小原の写す対象はかなり限定的だ。好きで気に入ったものは何年でも撮り続けるからで、アザラシのほかには、シロクマ、マナティ、プレーリードッグ、ホタル、そしてシマエナガなどだ。

ホタルに関しては、動物写真と呼ぶよりも風景写真と言った方が適切だ。そこには失われゆく日本の自然が記録されている。

三〇年近くアザラシを撮り続けた小原は、地球温暖化の目撃者でもあった。流氷が明らかに減少しているからだ。シマエナガを撮り始めたのもアザラシの赤ちゃんの代わりだった。流氷の減少はアザラシの生存の危機を意味する。報道写真を辞めたはずの小原に、再び伝える役割がやって来た。

それでも小原の語り口は物静かだ。かわいらしい動物を撮り続けることで、忍び寄る自然破壊に警鐘を鳴らしている。「好きになれば大事にしてくれる」。それが小原玲の確信なのだ。

アザラシ

シマエナガ

小原 玲（おはら・れい）1961年生まれ

前橋高校在学中に「第3回高校生フォトグランプリ」を受賞したことから写真家を志す。写真週刊誌フライデー専属カメラマンを皮切りに、米国写真通信社のカメラマンとして天安門事件などを取材。アザラシの赤ちゃんとの出会いを契機に動物写真家に転身。シロクマ、マナティ、プレーリードッグ、日本のホタルなども撮影し、テレビ・書籍・雑誌など様々なメディアで活躍。著書・写真集に「アザラシの赤ちゃん」（文春文庫）、「流氷の伝言-アザラシの赤ちゃんが教える地球温暖化のシグナル」「ほたるの伝言」（教育出版）、「シマエナガちゃん」「もっとシマエナガちゃん」「ひなエナガちゃん」（講談社ビーシー）など多数。

お客様紹介

株式会社アイテク 様

群馬県高崎市問屋町

株式会社アイテク様 新社屋外観

株式会社アイテク様は電気設備工事を中心に手掛け、「良質の施工・工費の低減・工期の厳守」をモットーに、お客様のニーズに迅速に対応し、見積から設計施工管理、メンテナンスまでワンストップ体制でお客様をサポートしています。

北形社長は㈱ヤマトの協力会社の会「㈱ヤマト共栄会緑会」の会長を務め、㈱ヤマトの事業推進に大きく貢献していただいています。

株式会社アイテク 事業内容

電気設備事業部

創立以来の事業として、お客様から大きな信頼をいただいています。

FAシステム事業部

工場の生産現場のオートメーション化をより効率良く実現します。

ソリューション事業部

お客様のニーズに合った製品を調達し、事業開発を行います。

施設概要

所在地 〒370-0006 群馬県高崎市問屋町2-4-5
延面積 757.14㎡(229坪) S造2階建
設計 (建築)石井設計 (機械・電気)㈱ヤマト
施工 建築・機械・電気 ㈱ヤマト
竣工 2018年8月

お客様の声

株式会社アイテク 代表取締役社長 北形 信也 様

新社屋の建設に際して、一番の目的は、全社員間のコミュニケーションを良くすることでした。従来は、事業部ごとに執務室が分かれていたので、新社屋はオフィスをワンフロアにし、話をしやすい職場環境を作りました。以前に比べ、円滑なコミュニケーションが取れていると感じています。外観は、取引先の方から「カフェのようだ」と言われました。デザイン性のある建物は、社員のモチベーションにも影響すると思います。社員から「きれいでカッコイイ新社屋が出来て良かった」との声があり、新築を決断した甲斐がありました。

ヤマトさんが進めている見える化による早期意思決定や生産設計と施工の工業化は、当社の本業である電気工事にも大きな関わりがあります。今回の新築工事で、見える化、工業化をリアルに体験することができ、大変勉強になったとともに、今後の課題を把握することができました。ヤマトさんの先進的な取り組みを、当社の業務にも採り入れ、ヤマトさんとともに発展していきたいと思います。

㈱アイテク新社屋 設計・施工の特色

建物価値を高める調達

お施主様、設計者、施工者の三者が、建物の計画・設計の初期段階から形状・デザイン・内装や設備の詳細仕様などを、リアリティのある3次元の図面で共有します。これにより、お施主様の早期の意思決定が期待でき、施工者の生産性の飛躍的な向上につながります。お施主様は、高品質の建設製品を短工期で、経済的にメリットのある調達が可能となります。

サポートセンターの活用

サポートセンターでは、大画面の4Kモニターに投影される等身大の3次元CGにより、建物の内装、設備の詳細な仕様などを確認することができます。また、実物のサンプルで質感を確認できるので、お施主様にとっては納得性の高い建築製品を調達できます。

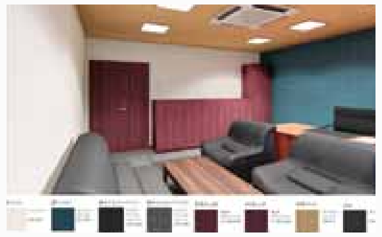
生産設計と施工の工業化

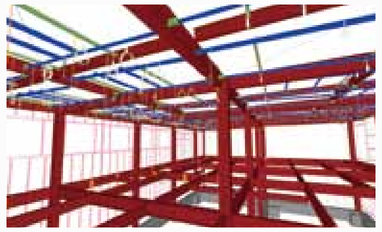
建築製品をお施主様のご要望どおりに施工するために、3次元CADによって建築・設備をそのまま施工できる「生産設計図」を作成します。生産設計の導入により、設計段階から設備配管の詳細設計図が作成できるので、工場でのプレハブ加工が可能となり、施工の工業化が進展します。

空調機の冷媒配管は銅製品が一般的ですが、軽量で材料単価が安いアルミ配管を採用しました。アルミ冷媒管は次世代配管で、プレハブ工場で加工し、現地での溶接をしないで高品質の施工を実現しました。

建物外観完成イメージ(3DCG)

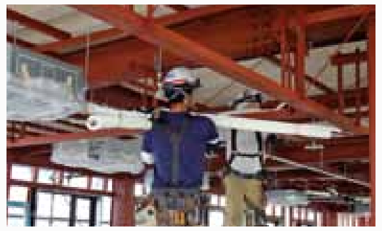
水廻り設備仕様イメージ(3DCG)


建物内装仕上げ材イメージ(3DCG)


天井内納まり図(3DCAD)

サポートセンターでの意思決定

サポートセンター
㈱ヤマト朝倉工場内
群馬県前橋市下佐鳥町1001-2


工場プレハブ支持金物への配管施工

設備生産工場

アルミ冷媒配管の工場プレハブ加工